

高等学校における「人間としての在り方生き方」教育に関する研究

ー公民科（倫理）における「問い」に焦点をあててー

M12EP010

樋口 繁章

1. はじめに

『高等学校学習指導要領解説総則編』には、以下のような内容が記されている。高校生は、自分の人生をどのように生きればよいのか、その意味は何かについて悩む時期である。さらに、国家・社会について関心をもち、それらのあるべき姿について考察を深める時期でもある。その中で、高校生は、自らの人生観・世界観・価値観を形成し、主体性をもって生きたいという意欲を高めていく。従って、このような時期に人間の在り方に深く根ざした人間としての生き方に関する教育を推進することを求めている。

しかし一方で、高等学校の授業形態は教師から生徒へのいわゆる知識伝達型の一斉授業が多く、学習内容を教師と生徒が深め、さらに生徒の内面への働きかけが不足しているのが現状である。

ところで、「人間としての在り方生き方」という表現は、高等学校学習指導要領の公民科の目標にも、また公民科に含まれる科目「現代社会」と「倫理」の目標にもある。それらに含まれる内容を考えれば、学問分野としては、主として、哲学や倫理学や心理学などの分野で扱われている問題でもある」（林，2010）。

従って、今年度は実存主義の単元において、どのような「問い」と教授方法が「人間としての在り方生き方」教育を深めることができるのかについて実践研究を進めることとした。

2. 先行研究

高等学校の「人間としての在り方生き方」教育に関する研究は数多い。その大半は学校の教育活動全体を通じて行われている、学校行事に特化した研究内容である。本研究のような公民科の授業改善を通じた研究は少ない。

そこで、生徒に「人間としての在り方生き方」を深める授業と高等学校での知識伝達型の授業改善を目指して「問い」と教授方法に着目した実践研究を行う。

3. 研究の目的

以下の仮説（1）～（3）の検証を目的とする。

- （1）公民科「倫理」の授業を通して、生徒に自己の視点の「問い」から他者や社会の視点を含む「問い」を段階的に考えさせることによって、自己と他者、さらには社会との関係から改めて人間存在について考察できるので、「人間としての在り方生き方」について思索を深めることができる。
- （2）生徒同士が「問い」を深める教授方法を授業内に取り入れることによって、異なる視点からの多面的な考えに触れることができるので、「人間としての在り方生き方」について多面的に考察することができる。
- （3）単元の学習内容を深めるため、現代の諸問題を取り入れた「問い」を考察させることで、学習した先哲の考え方をを用いて諸問題を分析することができる。その中で、「自己の在り方生き方」，

「人間としての在り方生き方」について考察することができる。

- (4) (1) から (3) を実践することにより、「自己の在り方生き方」、「人間としての在り方生き方」について考察を深めることができ、また、公民科「倫理を学ぶ意義」や「自分とは何か、人間とは何か」について、変容が見られる。

以上の仮説を生徒の授業中の反応や授業後の記述から検証する。

4. 研究の方法と内容

(1) 研究対象校

：山梨県立高校 3 年生，54 名

(2) 研究で対象とする授業の期間

：平成 25 年 4 月から 11 月

(3) 取り上げる主な単元：実存主義

① 単元設定の理由

先哲の思想にはそれぞれの人間観・世界観がある。その先哲が「どのような人間観・世界観を引き継いでいるか、もしくは全く新しいものを構築したのかをまず正確に捉えなければならない。その上で、現代に生

きる生徒が経験するであろう具体例を示さなければ、焦点がぼやけてしまう」（下前，2011）。

よって、生徒が主体的に生きる意味を先哲の思想と共に考察できる教材（単元）として、実存主義を設定した。実存主義とは、高度化した科学技術や巨大化した社会組織の中で、個性を喪失して日常性の中に埋没している人間に、主体性の回復と本来的自己の発見を説く現代思想である。従って、授業展開では主体性を喪失させた時代的特徴を分析し、さらに主体性を喪失した人間とはどのようなものなか、主体性を回復した人間とはどのようなものなのか、を考察する。授業内で取り上げる思想家の人間観・世界観を手掛かりとしながら、「自己の在り方生き方」を考察し、「人間としての在り方生き方」とは何かを深めることができる、と考えた。

② 学習指導案及び主な「問い」とその属性（資料 1-1，1-2）

(資料 1-1)			
時	学習項目・学習内容	問いの属性	問いの内容
1	実存主義の背景について、産業革命以後の資本主義体制の成立により人間の在り方がどのような変化をもたらしたのかについて、問いを中心に授業を行う。資本主義体制が人間の主体的判断力を弱め、人間を平均化して行ったことを指摘する。その後、キルケゴールの思想についての基本的事項について学習を行う。特に、人間が自己の在り方に目覚めていく過程をどのように示したのか、について理解を深める。	自己の在り方生き方を問う内容として、閉じた個人の視点を問う「問い」（キルケゴールの「実存の三段階」との関連から、自己の在り方生き方を問う内容を重視）	「あなたにあなたが「いかにかかわるか」 その他の問い 「資本主義はどのような変化を人間にもたらしたろうか」
2	ニーチェの世界観を学ぶ中で、主体的に生きる理想としての超人の在り方について学ぶ。その中で、主体的に生きる人間の在り方について考察を深めさせる。授業の最後には、キルケゴールとニーチェについて準備した問い（1 時間目と 2 時間目の「問いの内容」）を考察し、他者の意見を交流させながら、自己の考えを振り返る機会としたい。	自己の在り方生き方を問う内容から人間としての在り方生き方へと繋がる「問い」（ニーチェの超人、永劫回帰の思想から、今までの自己の在り方生き方を省察しながら、人間としての在り方生き方を問う内容を重視）	「人間とは乗り越えられるべきものである。あなたがたは、人間を乗り越えるために、何をしたか」 その他の問い 「ニーチェにとって主体的に生きるとは何か」

(資料 1-2)			
時	学習項目・学習内容	問いの属性	問いの内容
3	前時の実存主義(キルケゴールとニーチェ)の内容を復習すると共に、本時で学習する実存主義の内容との相違点を明らかにする。特に、時代背景に注目し、20世紀に問題となった人間性を喪失する事例を踏まえながら、両者の違いを明確にする。その後、前時で生徒が記述した内容を共有し、実存主義に対してどのような理解をしたのかを知る。ヤスパーズの思想とハイデッガーの思想についての基本的事項について学習を行う。両者の違いを意識しながら、授業を行う。	個人と他者・社会の視点を取り入れた内容として、人間としての在り方生き方へと繋がる「問い」(ヤスパーズの「実存的交わり」、ハイデッガーの「ひと」の思想内容を重視)	「有限な自己と他者との関係はどうあるべきだろうか。」「人間本来のあり方とは何か」 その他の問い 「人間性の喪失をもたらした問題とは何か」
4	サルトルの「実存は本質に先立つ」という言葉を取り上げ、生徒に自由に解釈させるところから、サルトルの実存主義を深めさせる。その中で、サルトルが考えた自由と責任の関係や他者との関係へと思考を広げる手立てを行いながら、授業展開を行う。最後にパートナーであったボーヴォワールの著作についても紹介する。授業の最後に本日取り上げた思想家3人の振り返りを行いながら、思想内容と自己の在り方生き方を思考する中から人間としての在り方生き方を考察させる。	個人と他者・社会の視点を取り入れた内容として、人間としての在り方生き方へと繋がる「問い」(サルトルの「アンガージュマン」の内容理解を深めながら、他者や社会と共存する人間としての在り方生き方を考察させることを重視)	「全人類(社会)に対する責任を自覚する生き方とは何か」 その他の問い 「自己の選択が全人類に影響するとはどのようなことだろうか」
5	実存主義の思想家を一人あげ、その思想家の考え方を自分の言葉で述べよ。		

資料 1-1・2 に基づいて、実践授業を行う。「問い」の属性として、以下の3つの視点を取り入れた「問い」を準備し、第1段階から第3段階へと段階的に考察を深めさせる。

○第1段階：自己の在り方生き方を問う内容として、閉じた個人の視点を問う「問い」…例：「あなたにあなたが「いかにかかわるか」」

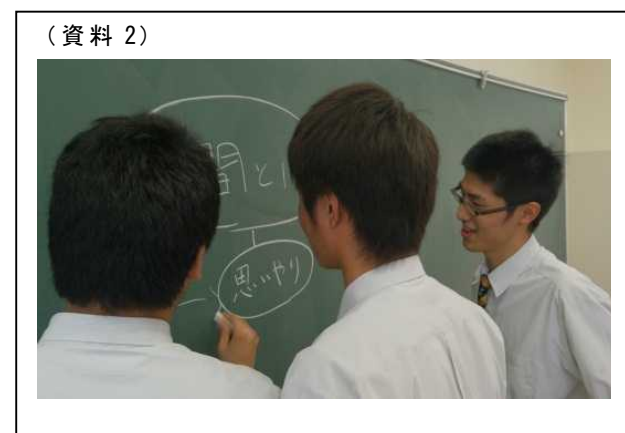
○第2段階：自己の在り方生き方を問う内容から、人間としての在り方生き方へと繋がる「問い」…例：「人間とは乗りこえられるべきものである。あなたがたは、人間を乗り越えるために、何をしたか」

○第3段階：個人と他者・社会の視点を取り入れた内容として、人間としての在り方生き方へと繋がる「問い」…例：「有限な自己と他者との関係はどうあるべきだろうか」・「人間本来のあり方とは何か」・「全人類(社会)に対する責任を自覚する生き方とは何か」

③ 生徒同士が「問い」を深める教授方法

生徒同士で「問い」を深めさせるために、生徒主導の教授方法を授業に取り入れる。教師が「問い」を短く設定し、設定した「問い」から次々に生徒が連想した言葉を書き込む方法を取り入れる。具体的には、マインド・マップの手法を取り入れ、個人ではなく、集団でマップを作る方法を行う。

(資料 2)



④ 単元の学習内容を深める「問い」を取り入れた教材

単元終了後に単元の内容をさらに深めるために、先哲の考え方によって現代の諸問題を分析する「問い」を取り入れた教材を準備する。学習した内容と関連する現代社会の諸問題を考察させる。(資料 3-1・2)

(資料 3-1)

仕事を楽しみなら人生は天国だ、仕事が職務なら人生は地獄だ (ロシアの作家ゴーリキー『どん底』より)

ロシアの作家ゴーリキー (1868～1936) は、貧困にあえぐ民衆の姿を描いた作品『どん底』の中で、上のように述べている。働くことは収入を得て生活を安定させることのほかに、自分の能力や個性を発揮して生きがいを得たり、社会に参加して人々に貢献するなど、人間的な深い意味を持っている。

しかし一方で、やりがいや、生きがいを得る場であるはずの労働が、単なる生活の手段として苦痛なものになることもある。現代の日本では、働かなくても仕事に就けない失業者、働く意欲をなくして求職活動を行っていないニート、低賃金で雇われて十分な収入が得られない非正規労働者のワーキング・プアなどの問題が起こっている。また、労働基準法があっても、過酷な労働条件の中で、非人間的な生活を強いられ過労死におちいる人がいる。また、海外から日本に仕事を求めてやってくる外国人労働者の受け入れ方の問題もある。

全ての人が人間らしく働ける公正で平等な社会を目指すためには何が必要だろうか？

(資料 3-2)

『赤い薔』…現代人の自己喪失

現代人の生き方に様々な疑問を投げかけた作家安部公房の作品に、『赤い薔』がある。ある男が、自分の家を探しまわるとどこにもない。もともとその家は存在しないのである。彼はたてた男がベンチに座って休んでいると、自分の足元から赤い糸が出てくるのに気づく。彼はそれを引っ張って、自分が入るカプセルのような箱をつのりはじめる。糸を引っ張るにつれ、彼の姿が消えていき、赤い薔が完成したとき、彼の姿は消滅してしまう。

この不思議なストーリーから、自分の居場所を失い、自分自身さえ見失った現代人の不安が伝わってくる。リースマン (1909～2002、アメリカの社会心理学者『孤独な群衆』) は、現代人は孤立することを恐れて、他人の行動に同調し、他人の承認を強く求める他人指向型の人間が多いと分析している。孤独への不安を抱えながら、他人と同調することで「みんなと同じ」という安心感に逃げ込もうとする。一人でいることを避けるかのように、たえず携帯電話で話し続ける青年たちの姿も、他人指向のあらわれかもしれない。

しかし、そのような行き過ぎた他者への同調は、自分を見失うことにならないだろうか。

⑤ 公民科「倫理を学ぶ意義」と「自分とは何か、人間とは何か」について、生徒の姿容をみとる

⑤の検証のために、資料 4 のシートを用いた。すなわち、授業前・中・後で「倫理を学ぶ意義は何でしょうか?」、「自分とは何か、人間とは何か」について記述させる。(資料 4)

(資料 4)

・「倫理を学ぶ意義は何でしょうか?」。あなたは今、どのように考えていますか?

・「自分とは何か、人間とは何か」。あなたは今、どのように考えていますか?

記入日 月 日

・「倫理を学ぶ意義は何でしょうか?」。あなたの考えは、どのように変化しましたか?

・「自分とは何か、人間とは何か」。あなたの考えは、どのように変化しましたか?

記入日 月 日

5. 研究の結果と考察

(1) 主な「問い」とその属性についての結果と考察

「人間としての在り方生き方」を深めるためには、「問い」を「閉じた個人の視点で問う」内容と「個人と他者・社会の視点を取り入れた」内容を段階的に考察させることで、「自己の在り方生き方」から「人間としての在り方生き方」を深めさせることができた。

「人間としての在り方生き方」を深めた記述とは、次の 2 点を含むものとした。

○視点 1

学習した思想家の人生観・世界観ないし価値観を取り入れた記述が見られる。生徒自らの人生観・世界観ないし価値観の醸成が見られている。

○視点 2

自己の在り方生き方の個別性の内容だけでなく、人間としての一般的視点を取り入れた記述が見られる。自分自身や自己と他者との関係さらには社会について関心をもつ内容が記されている。

(資料 5)

時	問いの属性	問いの内容	生徒の記述例 (1～4 は同一の生徒 A) と考察
1	自己の在り方生き方を問う内容として、閉じた個人の視点を問う「問い」(キルケゴールの「実存の三段階」との関連から、自己の在り方生き方を問う内容を重視)	「あなたにあなたが「いかにかわるか」	キルケゴールは、「そのために私が生き死にたいと思うようなイデー」を見出すことが必要だと説いた。今の私にそれがあるだろうか、いや無い。私は、私が死んでしまう前に、如何に「自分が本当にやりたいこと」を突きつめていけるか。それを手助けしていけたらよいと思う。「私」が私に関するにはどのようにすればよいのだろうか。単に「そうしたい」と思うだけでよいのか。それとも意図的に自らの一部を「第三者」として客観的な場におくべきなのだろうか。どうなのだろうか。 (考察) 問いの属性に従って、学習した思想家の価値観を踏まえながら、内省をしている記述が見られる。自己の在り方生き方の個性性は見られるものの、人間としての一般的視点は見られていない。
2	自己の在り方生き方を問う内容から人間としての在り方生き方へと繋がる「問い」(ニーチェの超人、永劫回帰の思想から、今までの自己の在り方生き方を省察しながら、人間としての在り方生き方を問う内容を重視)	「人間とは乗り越えられるべきものである。あなたがたは、人間を乗り越えるために、何をしたか」	人間を乗り越えるという、自分は「昨日までの自分より成長する」ということだと考える。昨日までの自分を塗りかえるために、自分達は日々勉強し、生き、息しているのだと思う。果たして「人間は乗り越えられなかった」時、人間はどうなるのか。 (考察) 上記 1 と同様に問いの属性に従った記述が見られている。しかし、自己の在り方生き方だけではなく、人間としての視点が見られている。生徒の問いにもある「人間は乗り越えられなかった」時について深めることで、自己のみならず他者との関係から「人間としての在り方生き方」について考察させることができる。…視点 2
3	個人と他者・社会の視点を取り入れた内容として、人間としての在り方生き方へと繋がる「問い」(ヤスパースの「実存的交わり」、ハイデッガーの「ひと」の思想内容を重視)	「有限な自己と他者との関係はどうあるべきだろうか。」「人間本来のあり方とは何か」	自己は有限である。それは例えば「死」といった点からも明らかであると思う。「死」を目の前にして、自分の存在意義を確認するために、良い意味で他者に「依存」していくことが必要だと思う。他者は私に対してどのようなことを望んでいるのか。 (考察) 学習したヤスパースの思想内容を踏まえ生徒独自の考え方が記述されている。他者との関係について言及しているが、その内容については記述されていない。良い意味で他者に「依存」する内容について、深める問いを行うことで、さらに他者との関わりの中から、「人間としての在り方生き方」を深められると考える。…視点 2
4	個人と他者・社会の視点を取り入れた内容として、人間としての在り方生き方へと繋がる「問い」(サルトルの「アンガージュマン」の内容理解を深めながら、他者や社会と共存する人間としての在り方生き方を考察させることを重視)	「全人類(社会)に対する責任を自覚する生き方とは何か」	自分という存在は、他者に対して何かしらの影響力を有している。そしてその他者もまた同様に、他者に影響力を持っている。だから、「私は社会全体に責任を持っていると言えるのだから、そのことを意識して生活していかなければならない。」では、具体的には何をすればよいのか。 (考察) サルトルの思想内容を踏まえた生徒の記述が見られている。また、自己と他者・社会の視点を踏まえた内容が書かれている。さらに、「人間としての在り方生き方」に迫る手立てとして、「具体的には何をすればよいのか」という生徒の「問い」を深めることが考えられる。…視点 2
5	実存主義の思想家を一人あげ、その思想家の考え方を自分の言葉で述べよ。		

資料 5 中のゴシック部分（2～3 時目）が視点 2 の内容を含み「人間としての在り方生き方」を深めた記述として判断できる。

（2）生徒同士が「問い」を深める教授方法の結果と考察

資料 5 の 1 時間目から 4 時間目後の 5 時間目に生徒同士で「問い」を深める，生徒主導の教授方法を授業に取り入れた。その後「他者の考え方を聴き，自己の考え方はどのように変化したのか」を記述させた。

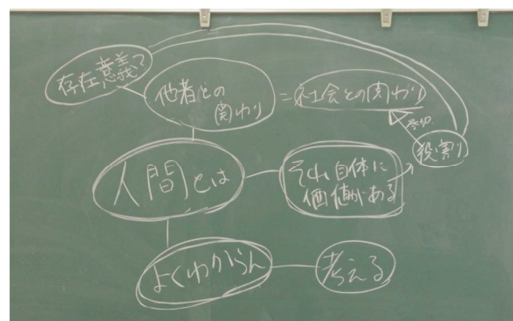
生徒 B	人間は他者との関わり，つまり社会の中で自分がどうあるのかを考えていく中で自分の価値を自覚し，自分にしかできないことや役割を見つけることで社会においての自己の確立をすることができる。その根底には，自分の存在意義を求めるという気持ちがあるのだと思う。
生徒 C	人間は利己的で欲を持っている。自分が好きなので，自分の欲を通したりすることで自分を表現し，存在を証明していくが，その限界として他者との関わりである社会がある。自分と社会との折り合いをつけていかなければ，自分の存在証明する場も与えられなくなる。自分自身と社会の許容範囲の最大公約数を見つけていくことが大切。
生徒 D	人間（個人）と社会は，表裏一体の関係であると思った。社会というものは，人間一人ひとりが集まってできるものであるが，しかし，何もせずに社会の中にとくと埋もれてしまったり，弾圧されたりもしてしまう。自ら自覚し，役割を見出すことが人間としてのすべきことであると思う。

（考察）資料 5 の 5 時間目に「問い」を深める教授方法を取り入れた結果，他者の意見を聴くことで，自己の考えが深まり，「人間としての在り方生き方」について考察している記述が見られた。（上の資料内のゴシック部分）また，他者と話し合った後，記述させることで各自の「人間としての在り

方生き方」についての内容が深まる傾向が見られた。

特に「人間としての在り方生き方」を深めた記述としてあげた，2 点うちの視点 2 の「自己の在り方生き方の個別性の内容だけではなく，人間としての一般的視点を取り入れた記述が見られる。自分自身や自己と他者との関係さらには社会について関心をもつ内容が記されている」に効果があったと判断できる。

（資料 6-1）



（資料 6-2）



（3）単元の学習内容を深める「問い」を取り入れた教材の結果と考察

単元の学習と現代社会の問題がどのように関連しているかを考察させながら，「自己の在り方生き方」や「人間としての在り方生き方」について深める「問い」を準備した。

資料 3-1-1 は，個人と他者・社会の視点を取り入れ，「人間としての在り方生き方」

へと繋がる「問い」として設定し、生徒が記述した内容である。資料 3-2-1 は、「自己の在り方生き方」を問う内容から、「人間としての在り方生き方」へと繋がる「問い」として設定し、生徒が記述した内容である。

資料 3-1-1 の生徒記述

思いやる気持ち。雇う側は、雇われる人のことを考えて仕事を与えて、雇われる側は、それに対して、一生懸命仕事をする。その両者に信頼関係が生まれれば、どちらも、嫌な思いをせず、また、公正で平等に人間らしく働くことができると思う。

自分の考えとしては、本当に平等で公正な社会を実現するのは難しいことだと思う。少しでも平等であるためには、仕事のない人に仕事を与えたりという考え方もあるが、実際には難しく、社会になにかを求めるのではなく、その人自身が考え、行動していくということが大切だと思います。

資料 3-2-1 の生徒記述

今、自分が過ごしている環境の中でも、他人に合わせて行動する人は多く見られる。自分自身の意見が、他の人のものと違うものである状況を恐れて、自分の意見を言わなくなる。私も最近そうかもしれないが、他人にばかり合わせることに慣れてしまうと、自分の意見を持てなくなるし、決断をすべて人任せしてしまう。そして、結果的に自分がどんな人なのかわからなくなるのだと思う。

他者への同調はある意味あってしかるべきものだと思う。古来から人間は自分と異なるカテゴリーに含まれる物を忌避し、また同時に自分が集団から排除されることを怖れてきた。「集団の一員であること」が自分の安全を守ることと同義であるとするならば、そうした意味で他者への同調は不可避なものだと思う。しかし、現代においては、確かに同調は行き過ぎているのではないだろうか。皆が同じドラマを見て、同じ食べ物にハマリ、同じゲームをしていないと、集団の中に属していることは、現代難しくなっていると感じる。そうした傾向が広まっていくことは、個々人の固有性の薄れ、いずれ自己の存在意義を失うことにつながると感じる。「自分の中の譲れないもの」を持つことが大切なのではないだろうか。

(考察) 資料 3-1-1・3-2-1 のように、単元

の途中や終了時にそれまでに学習した知識を用いて、現代社会の問題を考察させる「問い」を準備した。このことによって、思想の現代的意義について生徒に考えを深めさせることができた。(前の資料内のゴシック部分)

今後さらに、生徒の記述内容を分析し、深める手立て((2)の生徒同士が「問い」を深める教授方法)を行うことによって、「人間としての在り方生き方」について考察を深めることも可能である。

(4) 公民科目「倫理を学ぶ意義」と「自分とは何か、人間とは何か」について、生徒記述の変容の結果と考察

これまでの(1)から(3)の実践を通じて、多くの生徒が資料 7 にあるような変化が見られた。年度当初「倫理を学ぶ意義」を「大学受験のため」としていた生徒が 10 月の時点では「昔のさまざまな思想を学び、自らの人生を深めるため」と変容している。他方、「自分とは何か、人間とは何か」の問いに対しては、「(自分とは) 周りから必要とされる存在。(人間とは) 周りと強調し、同じでありたい存在」としていた生徒が 10 月の時点では「自己と他人とはまったく違う。欲望に駆られるのが、人間だが自己を律し、社会のためにも欲望を抑えることが出来る存在である。周りから必要とされるが、ないがしろにされることもある。」と変容した。

特に、「人間とは何か」については、複数の思想家の考え(資料 7 の生徒の場合は、カント、デカルト、サルトルの思想内容が見られている)を取り入れながら、多面的に人間分析を行い、生徒独自の人生観・世界観・価値観の記述が見られている。

特に「人間としての在り方生き方」を深めた記述としてあげた、2 点うちの視点 1

の「学習した思想家の人生観・世界観ないし価値観を取り入れた記述が見られる。生徒自らの人生観・世界観ないし価値観の醸成が見られている」に効果があったと判断できる。

(資料 7)

・「倫理を学ぶ意義は何でしょうか?」あなたは今、どのように考えていますか? 大学受験のため。	記入日 4月 15日
・「自分とは何か、人間とは何か?」あなたは今、どのように考えていますか? 周リから、必要とされる存在。 周リと協調し、周リに合わせた存在。	
・「倫理を学ぶ意義は何でしょうか?」あなたの考えは、どのように変化しましたか? 育つてくると、倫理の重要性が、 自分の人生と深く関係する。	
・「自分とは何か、人間とは何か?」あなたの考えは、どのように変化しましたか? 自己と他人とはまた違う。 欲望に駆られるが、人間に自己らしさを保ち、欲望を抑えることは必要である。 周リから必要とされる存在として存在すること。	
記入日 10月 2日	

6. 今後の課題

今回の実践で、「自己の在り方生き方を問う、閉じた個人の視点」を問う「問い」から「個人と他者・社会の視点」を取り入れた内容を問う「問い」へと段階的に問いを考察させることで、「人間としての在り方生き方」を深めさせることに有効であるとの知見を得ることができた。

しかし、課題も残されている。第一に、「問い」と教材観（単元）との関わりについては、未解決である。第二に、「自己の在り方生き方」や「人間としての在り方生き方」について考えを深める授業は、公民科だけが行うべき課題ではなく、やはり学校教育全体を通じて行う課題でもある。今回、その両者の関連については言及していない。第三に、今回の授業対象者である生徒には一定の効果が見られているが、他の生徒に

も同様の効果が得られるのかも残された課題である。

7. おわりに

「授業における教師の役割には次の二つがある。一つは、学習者に教科書の内容を理解させることであり、もう一つは適切な資質・能力を育てることである」(堀, 2009) これまでの私自身の授業を振り返ってみると、前者に重点が置かれた授業展開を行っている。高等学校での授業で「とりわけ問題なのは、後者の役割がほとんど授業で問題にされていないか、重要だと認識されたとしてもどのようにしたらよいかわからないため、手つかずの状態にあることである」(堀, 2009) との指摘がある。

今後も今回の授業実践で得られた知見を用いて、「人間としての在り方生き方」を生徒と共に深めながら、高等学校での課題でもある「適切な資質・能力を育てる」ことができればよいと考えている。

8. 引用文献, 参考文献

- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 総則編（平成 21 年 7 月）』, 2009
- ・林泰成, 白木みどり『人間としての在り方生き方をどう教えるか』教育出版 p.65, 2010
- ・下前弘司ほか「高等学校社会系教科における批判的思考力を育成する授業開発の研究 (1) - 公民科「倫理」の場合 -」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第 39 号 2011, 3, p.286
- ・堀哲夫「教師の授業力をどう高めるかー課題と視点ー」『理科の教育』Vol.58, No.684, pp.50-53, 東洋館出版社, 2009
- ・堀哲夫「理科を学ぶ必然性をめぐる課題と克服の視点」『理科の教育』Vol.58, No.686, pp.5-9, 東洋館出版社, 2009